

2013/01/20 礼拝メッセージ 近藤修司 牧師

主 題：信仰の成長を目指して3 : 希望における成長

聖書箇所：ピリピ人への手紙 3章7-12節

パウロは兄弟姉妹たちにそれがどこにあっても「私を見ならう者になってください」とそのように求めています。このピリピ教会に対してもパウロはそのことを求めています。3章の17節を見ると「兄弟たち。私を見ならう者になってください。また、あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください。」と書かれています。彼はイエスをしっかり見てイエスの教えに従い続けていました。信仰者としての責任を果たしていたのです。教会はそのようなところでは。信仰の先輩たちがどのように生きていくのかを後に続いて来る者たちに示すところでは。何年の信仰歴を持っているということは何を意味するのか？その人たちはそれだけ長い間キリストに従って来たのですから、本来なら、その人たちの生き様が信仰者としての模範を示すことになるはずでは。だから、私たちはみことばを聞くだけでなく実践するのです。実践することによって変えられていく、変えられていくことによって人々の前ですばらしい模範を示すことになるからでは。

今日の最初にこのようなことを言うと皆さんはショックを受けるかもしれませんが、皆さん、もし、私たちが信仰者として模範を示していないとすれば、このようなことが言えるかもしれません。「みことばをただ聞くだけの者であった。」と。なぜなら、私たちが分かっていることは、神はあなたを救ってくださったその瞬間からキリストに似た者に変えようとするその働きを始められたということでは。変わるからあなたは信仰者では。変わっていくからあなたはクリスチャンなのでは。でも、神があなたを変えようとするその働きを妨げるものは私たちの罪では。「みことばはそう言っているけれど…」と言って私たちはみことばに従って生きようとしません。そうすると私たちはなかなか変わって来ません。だから、私たち信仰者はこのようなことを止めなければいけないのです。「私を見ないでください。イエスさまを見てください。」と。パウロはそうではなかった。私たち信仰者は「私の生き様を見てください」と言うそのような者になることを神は求めているし、私たちはそのような者になっていくことができるということでは。だから、私たちはこうしてみことばを見ているのです。特に、そのテーマに関して見ているのです。私たちは信仰において成長していきたいと望んでいます。そのためにはみことばの実践がいるということでは。信仰の成長はどんなに望んでいても、神のルールに従わなければ神が望んでいるような、神が求めているような、神が私たちに与えようとするような成長を見ることなどできません。非常にシンプルなことでは。あなたの信仰は成長します。あなたは変えられていきます。みことばに従って行くなら…。だから、私たちはしっかりみことばを見て、どのように歩んでいけば良いのか、そのことをしっかり見た上で、助けを与えてくださる神によってそのように歩んで行くことでは。そのことを私たちは繰り返し見ているのです。

今日、私たちは「希望における成長」ということで、あなたが希望を持って歩んで行くためにどのようにすべきか、そのことをみことばからごいっしょに見ていきます。今日のテキストはピリピ人への手紙3章の7節から12節です。「:7しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。:8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあかたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、:9 キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからでは。:10 私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、:11 どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。:12 私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。」

☆希望をもって歩んでいくために

I. 歩みの動機

パウロは私たちに何度も「このように生きていきなさい」ということを教えてくれるのですが、同時に、どんな思いを持って生きていくべきなのかを教えてください。つまり、私たちの歩みの動機というものを彼は常に私たちに教え、私たちにチャレンジします。良いことをしているけれど、問題は、どのような思いを持ってしているかです。正しい動機を持って正しいことをしているなら、正しい神が喜ん

くださるし、正しい神が祝してくださる。でも、正しいことを悪い動機をもって為すことが出来るのです。その時に、正しい神はそれをお喜びになりません。これだけのことをしているし、神がお喜びになるこのような奉仕をしているから…と言っても、どんな思いをもってその奉仕をしているかです。いつもそのことを吟味しておかなければ、いつの間にか私たちは同じことをただ繰り返すだけになってしまいます。そして、当初は正しい動機を持ってやっていたことがいつの間にか形骸化してしまっ、形だけのものになってしまう危険性があります。みな、その弱さを持っています。ですから、パウロは私たちに何度も「あなたの働きのその動機は大丈夫か？」ということ問いかけてくれるのです。

A. 救いの喜び 7-8節

今日の箇所を見ると、パウロ自身が信仰者として人々の模範として歩んでいたその彼の動機の第一番目は「彼は救われていることを喜んでいて」であることが分かります。恐らく、パウロの特徴の一つは彼は本当に救われたことを喜びながら日々感謝しながら生きていたということでしょう。そのことが今読んだ7節と8節も記されています。ここを見ると「得」と「損」ということばが繰り返されています。彼は救われる前の自分と救われてからの自分を比較しているのです。

◎救われる前のパウロ：自分で救いを得ようとしていた

彼は一生懸命努力して、頑張っ、自分の努力によって神の救いを得ようとしていました。パウロが一番望みとしていたことは、神の前に義とされることです。言い方を変えると、罪の赦しをいただき、神とともに永遠を過ごせるその救いに与ることでした。そこでパウロが考えたことは、そのために何をしたら良いのか？ということ。神が与えてくださった律法をしっかりと守って、律法を落ち度なくすべて守るなら、私はこの祝福に与ることが出来ると、彼はそのように考えて、熱心に律法に従い続けて来たと言うのです。

ですから、パウロは自分自身の善行をもって神の義、すなわち、罪からの救いを得ることが出来ると確信して、そのように生きていました。3：6に「その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてなら非難されるころのない者です。」とあります。恐らく、彼もそのように言ったであろうし、人々もパウロの行ないを見て「本当に彼は熱心だ」とそのように思ったのでしょう。なぜなら、確かに、みことばを見ると、彼はイエス・キリストを信じる者たちを迫害するためにダマスコに向かっていたのです。ステパノを殺すことにも賛成していたし、多分、多くのクリスチャンに対して彼らを迫害するという決断がなされる時に、彼は間違いなくそれに賛成の票を投じていたはず。彼は律法を守れば良いのだと、そのように強く信じていたのです。ですから、5節にもそのことが記されています。「私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きつすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、」と。ですから、律法が教えるように割礼も受けているし、自分は神によって選ばれたイスラエル民族に属するし、12のヤコブの子どもの中でも喜ばれていたベニヤミンの子孫でもあるし、純粋なヘブル人であり、そして、律法について言うならパリサイ人としてどこから見ても申し分のない、救いにふさわしい者であると言うのです。ですから、彼自身はそのような自分の家柄や自分の民族を誇っていたし、自分自身の行ないをも誇りとしていたのです。もしかすると、このように思っていたのかもしれませんが。私は一番天国に近い、神が一番お喜びになるような者に違いないと。ですから、この5節、6節に記されている一連のことは、彼自身が救われる前に「得」だと思っていたこと。「得」ということばは新約聖書の中に3回出て来ますが、これは「自分の利益である、自分にとって益である」という意味で、神の義、救いをいただくために自分にとって益になるものである、自分に救いをもたらしてくれるものであると、パウロはそのように信じていたのです。その彼が神のあわれみによって、恵みによって救いへと導かれていくのです。

◎救われてからのパウロ：信仰によって救いを得る

彼は行ないではなく、自分の努力ではなく、イエス・キリストを信じる信仰によって救いを得ることが出来るということを主から教えられていきます。

1) 真理を知る

彼は最初に真理を知りました。どこで、どのようにして彼が真理を知ったのでしょうか？先ほども話したように、彼はダマスコに向かっていた。そして、その途上において死から復活された主イエス・キリストにお会いしたのです。そこで彼はやっと、自分が真理だと思っていたことがそうではなくて、神ご自身から何が真理なのかを教えられたのです。幾つかのことが言えます。

(1) 自分で自分を救うことができないことを知る

救いは自分の努力で得ることができると思っていたパウロに、それは真理ではなくて、実は、自分の

努力によっては決して救いを得ることはないということを彼は知らされるのです。どんなに熱心に律法を守っても、いかなる善行であっても、真剣な宗教心を持っていたとしても、それらは救いをもたらしません。私たちの日本においてそのような人はたくさんいます。信仰心に厚い人々はたくさんいるし、熱心にその信仰、宗教を守っている人々はいます。でも、どんなに熱心に信仰心を持ったとしても、私たちの行ないによって救いを得ることは出来ない、どんなに努力をしても神の栄光に達することはないのです。神が要求されているその完全な聖さ、正しさに到達することは出来ない、パウロはそのことをまず知ったのでしょ。

(2) 自分の罪を知る

同時に、「自分の罪」に初めて向き合いました。なぜなら、彼はこのイエス・キリストを信じるクリスチャンと言われる人たち、後にそのように呼ばれていくのですが、イエス・キリストを信じる者たちを迫害することが神の前に喜ばれることだと思っていたからです。ところが、このイエス・キリストを信じる者たちを迫害することは、神に喜ばれるどころか主を悲しませることであり、また、主に敵対する罪であると知るので。「とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ。」(使徒26:14)と言われました。「彼が、「主よ。あなたはどなたですか」と言うと、お答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」(使徒の働き9:5)と。だから、自分がやって来たことが正しいと思っていたのに、それは主に対する、神に対する大きな罪であるということとその時に知らされたのです。

(3) 主イエスだけが救いを与えることが出来ることを知る

自分で自分を救えないことを知っただけでない、自分の罪深さを知っただけではないのです。主イエスだけが救いを与えることが出来るお方であることを知るので。この救い、神の義というのは、イエス・キリストを信じる信仰によって、信じるすべての人に与えられることを知るので。ですから、パウロのメッセージを聞くと、そのことを繰り返して私たちに教えています。ですから、ダマスコに向かっていたパウロは、復活の主イエス・キリストに出会うことによって真理を知りました。

2) 救いに与る

また同時に、その時に彼は救いに与っているのです。今日のテキスト、ピリピ3:8を見ると「それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに」とあります。この「すばらしさのゆえに」という動詞は「より優れる、優っている」という意味です。パウロは「私が今まで大切だと思っていたこと、神に救われるために重要だと思っていたことは、実は、そうではなくて、このイエス・キリストこそが私が第一に求めている救いを得るために最も大切なものだ。」と知ったのです。日本語では「すばらしさのゆえに」と書かれていますが、英語の聖書では「並外れた、非常に優れた、その能力や期待、理解を越える」ということばが使われています。ですから、パウロが言っていることはもう比較にならないということです。今までどれほど重要なことかと思って来たことは、このイエスを知ったことと比べるともう比較にはならないと、パウロはそのように8節で語るのです。

今までは一生懸命、自分の努力でもって救いを得ようとしていました。でも、それが不可能であること、そして、その義、救いはイエス・キリストによってのみ与えられることを知ったパウロは気付くのです。これまでは確かに一生懸命やって来た、熱心に生きてきたけれど、それは自己満足をもたらすだけで神を満足させることは決してなかったと。だから、パウロは「かつて私にとって益と思っていたことが今は私にとっては損である、価値のないものだ。」と言うのです。この「損」ということばも「損失、損害」という意味だけでなく「不利益」という意味があります。ですから、パウロはあくまで、これまでの救われる前の自分にとって救われるために大切だと思ってきた数々のことは、実際に救われてみて何が大切なのかを知った今、それと比較したときに、もう比較にならないと言うのです。このイエス・キリストのすばらしさと今まで自分が大切だと思った行ないなど天秤にのせることが出来ない、余りにも違いすぎると言います。だから、パウロが気付いたことは「人々からすばらしいですね。あなたの熱心さはすばらしいですね。」とたとえ言われることがあっても、それは救いに関しては全く虚しいものだということです。彼のことがばを見るなら、それは「ちりあくた」であると8節の後半にあります。「ゴミ」だと言うのです。

3) 生き方の変化

パウロは真理を教えられ、このすばらしい救いに与り、そして、この8節を見ていくと、同時に、彼自身の生き方が変わっています。今も少し触れたように、まず、誇るものが変わりました。5節で見たように、パウロは確かにこのようなものを誇っていたし、人々もそのことは知っていました。でも、イ

エスを信じてから、救いに至ってから、彼自身そのようなものをいっさい誇っていません。彼が誇ったものはただ一つ、十字架に掛けられたイエス・キリストでした。私たち人間にとって最も大切な罪の赦しをもたらしてくださるこの救い主を、この贖いを彼は心から誇るのです。キリストによる救いと、救いを得るためにこれまで自分が行ない続けて来たあらゆることを彼は比較するのです。8節「それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損とと思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。」と、彼は「みんな捨てた」と言うのです。これまで自分が救いを得るために大切だと思って来たものを全部捨てたと言うのです。なぜなら、それらはゴミだからです。そんなものを持っていても全く価値がないからです。もし、それらが私たちに少しでも救いをもたらしてくれるものであるなら大切かもしれないけども、パウロの確信は「このようなものは救いを得るためには意味のない、虚しいものである」です。だから、彼はそれらを捨てたと言うのです。

パウロはこのような確信に到達したのです。今まで自分が大切だと思っていたものが実はそうではなく、今まで神に逆らうものだと思っていたイエス・キリストが自分にとっては一番大切な宝であると。こういう彼自身の思いの変化、生き方の変化を彼は非常に分かり易く私たちに教えてくれています。7節を見てください。「損と思うようになりました。」とあります。そして、8節には「いっさいのことを損とと思っています。」とあって、同じことばが書かれています。どちらも動詞ですが、パウロは異なった時制を使うのです。それはパウロの伝えなかったメッセージを読者たちがよく汲み取るためです。7節の「思うようになりました」は完了形です。昔にこのことが起こった、つまり、損と思うようになったのは今ではなくて昔のことだと言うのです。主イエス・キリストを信じこの救いに与ったときに、私は「何と自分は愚かで間違っていたのだろう。」とそのことに確信をおいた、それを確信した、そして、その結果が今も続いているということです。そして、8節には「損とと思っています」とあり、これは完了形ではなくて現在形を使うのです。ですから、エスを信じた時にそのように決心した私の思い、いかなる善行も救いには虚しい、イエスだけだというその思いは、信じた時にそのように思い、今現在もそのように思っていてその確信は揺らいでいないということです。だから、パウロはこのような時制を使うことによって読者たちにそのメッセージを与えたのです。パウロの確信は揺らいでいなかった。「イエスだけだ！」と確信し、そのように確信し続けていたのです。エスを信じた時から彼がそのように思い始めたということは7節に記されています。「私はキリストのゆえに、損と思うようになった。」とキリストが原因だと言うのです。なぜ、このように私がかつての善行を、かつて自分が誇っていたことを誇らなくなったのか？それはイエスが原因である。イエスを知ったから、イエスのすばらしさを知って、そして、何よりもこの方が私に救いをもたらしてくれた、だから、救われて以来、パウロはイエスを誇りそれ以外にものを誇る人生を放棄したのです。

覚えておきたいことは、パウロがイエス・キリストを信じてからこのピリピ人への手紙を書くまでの時間は約30年間だったということです。約30年間の信仰生活において、彼はただの一度もその確信が揺らぐことはなかったのです。「私は本当にイエスによって救われたことを何よりも感謝し、何よりもこのすばらしい救いを喜びとしている。」と、それがパウロの告白です。私たちがこのパウロのメッセージを聞く時に、最初に、パウロは救われたことを喜んでる人だということを知ります。30年間、パウロはこうしてピリピに手紙を送った時も変わらず、「私はこの救いに与ったことを本当に感謝している」と救われた喜びと感謝を持ち続けたのです。

B. 救いの希望 8b-9節

二つ目に、パウロの歩みの動機を見ると彼は希望をもっていました。「救いの希望」ですが、8節の後半から9節に記されています。「それは」ということばが8節の終わりにあります。パウロが今見て来たような生き方を歩んで来たその目的がここから記されているのです。「それは」ということばがそのことを私たちに教えてくれます。私がかつてのものを損と思い、イエスを得たことを得と思うその生き方の目的です。8b-9節「それは、私には、キリストを得、また、9 キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。」と、ここに三つの動詞が出て来ています。「キリストを得る」「キリストの中にあると認められる」「持つことができる」という三つのことばです。

1. 「キリストを得」

パウロは「キリストを得、」と言っています。二つのことが考えられます。

1) 救いのこと

間違いなく、パウロはここで彼自身の救いのことを話しています。この「得る」ということばを見たときに、確かに、私たちは「救い」のことと思います。パウロはそのことを言っています。「私は神によって救われた。キリストを得た。この救い主を私は得た。キリストによって私は求めていた神の義、罪の赦しをいただいた。」と。

2) キリストを知ること

同時に、実は、この「得る」ということばは「より深く知ること」を意味します。「キリストを得る」とは「キリストをより深く知っていく」と言うのです。「キリストを知る」とはどういうことでしょうか？もちろん、私たちはイエスがどのようなお方であるかを知っていきます。でも、それだけではないのです。私たちはイエス・キリストと一つにされることによって、私たち信仰者に神が約束してくださったその祝福を知っていくのです。

たとえば、私たちは神がすべての必要を満たしてくださると信じています。なぜなら、神は約束を守られるお方であるという確信を持っているからです。ですから、私たちはこうしてイエスによって救われた者は大変な祝福をいただいたのです。そして、私たちはこの救いを失うことがないのです。なぜ、そのように言い切れるのですか？神の救いのみわざが完全だからです。そして、そのようにみことばが私たちに教えるからです。私たちがどのような試練に会ったとしても、神はそれを覚えておられ、しかもその試練を通して私の信仰を成長させてくださるのです。なぜ、そう言えるのですか？みことばがそのように教えているからです。言わんとしていることがお分かりになりますか？キリストを知ることとは、イエスがどんなにすばらしいお方であるか、この三位一体の神がどんなにすばらしいお方であるかを知るだけでなく、この神によって与えられた約束がどんなにすばらしいものなのか、そのことを知っていくことなのです。この二つは引き離すことが出来ないのです。神がどんなにすばらしいお方であるかを知れば、その方がどんな約束を与えてくださったのかを知ることになるし、どのような約束を得たのかを見るなら、その約束をくださった神がどういう神であるかということを知っていくのです。

パウロが「よりキリストを知る。より深く知っていく。」ということをお願いしたときに、彼自身だけでなく、すべての信仰者たちがこのキリストによって与えられている祝福をより深く知ることを望んでいるのです。コロサイ2：3には「このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。」とあります。ですから、私たちはどんなにすばらしい祝福を得たのか、そのことを知って、そのことをしっかりと覚えて、そして、そのことを喜びながら歩んで行くことが出来るのです。この約束をくださったのは神ご自身だからです。

皆さん、思いませんか？主がともにいてくださるといことは私たち信仰者にとって大きな慰めです。「一人ぼっちではない。全能の神がいっしょにいてくださり、全知の神がいっしょにいてくださる。」と。もし、その事実をいつも覚えながら生きるなら、涙を流すようなことがあったとしても、私たちはそのことを神に感謝しませんか？つまり、私たちが日々経験するいろんな困難や問題や苦しみや悲しみなど、その中であつても私たちが正しく歩み続けていくことが出来るのは、私たちがどのような神が私とともにいてくださるのか、どんな約束が与えられているのか、そのことをしっかりと覚えるからです。それが私たちの確信となって強まって行けば行くほど、私たちはその中であつて喜びをもって感謝をもって、そして、もう一つ言うなら、期待をもって生き続けることが出来ると思いませんか？「神がこんな約束をくださったのだから！」と、私たちはそのような信仰者へと変えられていくのです。

ですから、まず、パウロが「キリストを得る」こと望み、そして、読者たちにもそのように望んだということは、そうすることによってその人の信仰が成長していくからです。

2. 「キリストの中にある者と認められ」

これは先ほど見たように「キリストを得る」ということ、キリストによって救われた者たちすべてはキリストの中にある者であるということです。神がそのようにあなたを見てくださるのです。信仰者の皆さん、パウロは9節の中で「義」について話しています。「律法による自分の義ではなくて、」と、今見て来たように、律法を守ることによって、自分の努力、行ないをもってこの「義」「神の救い」を得るのではなく、キリストを信じる信仰によって「義」「救い」をいただくということです。あなたがキリストによって義をいただいたなら、罪の赦しをいただいたなら、神があなたをご覧になる時に、感謝なことに、あなたの上にキリストの義が与えられているのです。ヨハネ15：15に「わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。…わたしはあなたがたを友と呼びました。」とあります。キリストとこの特別な関係に入れられたのは、キリストの義を得たからです。ちょうど、あなた自身が「義の衣」を

着たように、義の衣であなたが覆れているように、そのような存在として神はあなたを見てくださるのです。だから、「キリストの中にある者」とあなたは見られるのです。すごいことです。それが信仰者なのです。私たちは自分を見た時にそこに多くの罪を見ます。信仰をもったと言っても、今までと同じような罪の思いがあったり、そのようなことを行なったりしてしまいます。でも、キリストがあなたをご覧になる時はあなたは神の義によって覆われているのです。義の衣を着せられた者として、神はあなたを見てくださるのです。あなたは「キリストの中にある者」として神は見てくださるのです。なぜなら、あなたはキリストを得たからです。救いに与っているからです。あなたはキリストと特別な関係の中に入れられているのです。いくつかのみことばを見ましょう。

ガラテヤ 3 : 27 「バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。」

Ⅱコリント 5 : 21 「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方であって、神の義となるためです。」

ローマ 3 : 20-23 「なぜなら、律法を行うことによって、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。:21 しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義が示されました。:22 すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。:23 すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができません、」

3. 「持つことができる」

「神から与えられる義を持つことができる、」とあります。私たちが混乱してしまうことは「義を持つことができる」と言うけれど、もう私たちは義をいただいたのではないか？ということです。確かに、私たちはいただきました。イエスを信じた時に義の衣を着せていただいて神の前に立つことができる者になったのです。でも、私たちが知っているように、私たちのすべてが聖くなった訳ではありません。私たちにはまだ「肉」があるのです。古い性質をもっているのです。それが完全にされるときに私たちは完全に義とされるのです。でも、それはまだ先のことです。ですから、パウロがその時を待って「神から与えられる義をもつことができる、という望みがあるからです。」と記しているのは当然のことです。

確かに、時制を見てもこの「得る」、「認められる」という二つの動詞は過去のことを話しています。ところが、三つ目の「持つ」というこの動詞は現在の時制が使われています。ですから、今だけでなく将来にもこのようなすばらしい約束を持っているのです。私たちはキリストを得たのです。キリストの中にある者として認められたのです。なぜなら、私たちは信仰によってこの義、救いをいただいたからです。そして、その救いをいただいた私たちは、この罪のからだから解放されて栄光のからだをいただくその日を待っているのです。「義を持つことができる」、私たちは完全な者とされる、その希望を持って生きていくと、パウロはそのような歩みをしていました。そして、私たちにもそのような希望を持って生きるようにと言うのです。どんな時でも、何をしている時でも、私たちの持っている救いの喜びが私たちの行ないの動機になるように、私たちがすべてのことをする時に、私たちにはすばらしい未来が約束されている、罪から解放されるその日がやって来る、主イエス・キリストにお会いして私たちはこの祝福の中に入れられる、その日をしっかりと待ちながら、今日、私たちはその約束をいただいた者にふさわしく生きていこうとするのです。

Ⅱ. 実際の歩み 10-12節

10節から見ていきます。「:10 私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、:11 どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。:12 私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして、追求しているのです。そして、それを得るようとキリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。」今は詳しく見ることはできませんが、皆さんにこのことだけ言います。私たち信仰者にとって救いを得ること、この義を得るということ、罪から赦されるということは私たちの人生における最終目的地ではないということです。新しい生活のスタートなのです。多くの人たちは「罪が赦された、救われた」、それで終わりとしがちです。もしそうなら、私たちはその瞬間にみな召されてもおかしくないはずですが、でも、神はこのように罪深い私たちをこの地上においてくださっているのです。そこには目的があるからです。

A. 主の力によって生きる

その目的とは私たちが新しい歩みをするためです。ローマ 6 : 4 を見てください。「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によ

って死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。」とあります。信仰者としてそれにふさわしい歩みをして行くことだと言えます。今日、私たちが最初に見たことは何でしたか？パウロが「私を見てください。私を模範として歩みなさい。」と言ったことです。なぜなら、パウロ自身は新しく生まれ変わった者として、それにふさわしい歩みをしていたからです。そして、その要求はあなたや私に神から与えられていることは明らかです。「救われた者にふさわしく生きていきなさい！」とは当たり前のことではないですか？神はあなたを天国に入れる者にしてくださった、だから「好きに生きなさい」などとどうして言われるでしょう？神があなたを生まれ変わらせてくださったのは、あなたを用いて神の栄光をあなたを通して現わすためです。だから、私たちに必要なことは、神が望んでおられるように生きていこうとすることです。つまり、聖書のみことばを通してみこころを知り、そして、神の力をいただいてそのみこころを実践して行くことです。

実は、そのことはすでに2章から私たちは学んで来ました。そして、3章に入って、今日の箇所からもパウロは再びそのことを私たちに教えようとするのです。信仰者の皆さん、すばらしい力が神によって約束されています。あなたは変えられていく、主に喜ばれる者として変えられていくと約束されているのです。私たちに必要なことは、しっかりとキリストを誇り、神が与えてくださったみことばを覚えてそのみことばに従って行くことです。そして、その歩みを神は助けてくださり、そして、あなたを通して神の御栄えを現わしてしてくださるのです。

繰り返しますが、私たち信仰者にとって一番大切なことは、私たちがみことばを実践することです。そのときに人々はあなたや私のうちにおられる神が真実な方であることを知ります。なぜなら、私たちは「いつも喜ぶことが出来る」と語ることが出来るからです。でも、そのためにはいつも喜ぶ者として生きていることが必要です。そのときに人々は「この人たちが言っていることは本当だ」と分かるのです。「神を愛し隣人を愛する」と言いながら、私たちが兄弟姉妹のことを非難しているなら、彼らは私たちに対して「偽善者だ！」と見ます。

だから、パウロは言うのです。「あなたは生まれ変わった者だから、それにふさわしくしっかりと生きていきなさい。」と。みことばの教えに従って行くことです。神が備えてくださるその大きな力、その力について次回私たちは学びたいと思います。行ないをもって主のすばらしさをこの一週間も証してください。

《考えましょう》

1. パウロが救われたことを感謝し続けることが出来たのは、どうしてだと思いますか？
2. なぜ、みことばを「生きる」こと、すなわち、実践することが重要なのでしょうか？
3. パウロが主に願った「完全にされる」とはどういうことですか？
4. どうして「完全にされること」を願いながら生きることが重要なのでしょうか？